●8月選評

小島なお

・音無　早矢（埼玉県）

じゃんけんが強いくらいで
勝った気になるなよ、
夜は長いよ、とても

たとえ今じゃんけんで勝ったところで。人の価値観の多様性が世界を深く荒く切り開いてきた。未来へどんどん長くなる夜の時間をいかに勝ち抜くか。

・上村りん（奈良県）

電話をしながら
桃の染みに漂白剤をかける
虫が網戸にあたる夜

なんとなくの相づちを打ちながら。桃の薄い染みは目立たないようでいて意外とわかる。誰にも知られないひとりきりの懸命な時間がじじ、と進んでゆく。

・詩央えみる（大阪府）

「ピーラーで
梨を剥いても美味しいよ」
秋風みたいに涙を拭く

皮が剥ければ同じはずなのに、包丁の方が正しい感じがするのはなぜだろう。秋風のさりげなさでこの世のあらゆる思い込みや偏見がなくなればいいのに。

・土居　尚子（東京都）

どうくつとあの頃よんだ豆腐屋を

右に真っ直ぐタクシーに言う

奥が深く、暗く濡れていた洞窟。豆腐屋を横目に覗くとき、ふいにあの頃まなざしに戻る。洞窟に仕舞われた戻らない歳月がひたひたと滴る。

・花野　木春（東京都）

凍らせたペットボトルを陽に翳す
ペンギンはいない　私の南極

猛暑に汗をかきながら、あと一時間もすれば水になるペットボトル。この中に閉じこめられている小さな氷の塊を私の所有するかなしい南極として。

・うかつな（東京都）

葉脈が血管みたい
その逆を言うためだけに
光りませんか

「血管が葉脈みたい」。誰かが私の手の甲を見て言うのだろうか。その時の私はすこしだけ木になっている。巡る血を光らせて、誰を待って佇むのだろう。

・井口　可奈（東京都）

手巻き寿司
ほそい刺身のことが好き
わたしには電話番号がある

あらかじめ細くカットされた刺身。手巻き寿司以外の用途がなさそうな、刺身なのに心許ないような。わたしはわたしを保証する電話番号をひしと携えて。

・雲理そら（大阪府）

ぬいぐるみが空へ舞う日々を
五百字で書き終える前に
星がおわるよ

偽物に見えるけれど紛れなく本物の現実をどうやってたった五百字で書きえるのか。書いては消し、反故にするうちにこの星は滅んで、この日々は残らない。

・中原紘（山口県）

テラリウム返事をしてよ
テラリウム
優しく政治を教えたげるよ

ガラスの中の動植物の美しく閉じられた世界。その完結した空間が政治と無関係な均衡を保っていられるのは、すべてが美に統べられているゆえだろう。

・常田　瑛子（山口県）

「小説にならなかった」と胎盤を
　呑み込む前に対岸を見る

小説を書き上げるには多くの素材を貪欲に見つける必要がある。ときには臓器すらもネタとして。対岸には書くはずだった理想の小説が遠く見えている。